南朝四代の広州の仏教

林　伝　芳

広州の仏教は、東晋時代に曇摩耶舎がきて白沙寺を創設し、多くの徒衆を度したことによってその基礎が築きあげられたが、南朝に至つて外国の訳経師や京師の学問僧が相次いで広州に入つたことにより、仏典の翻訳や講説が盛んになり、仏寺が次々に創建され、仏教が民間に広く普及し、そしてまた広州出身の僧尼がはじめて出現するなど、めざましい発展を見せている。

南北朝時代（四二〇～五八九）に中国にきた外国出身の訳経師は三十七人ほどかぞえられる。[1] このうち、広州と何らかの関わりを有するのは、資料で判明できる限りではわずかに八人[2]しかないが、しかしこのなかには求那跋摩・求那跋陀羅・僧伽跋陀羅・拘那羅陀らのようなすぐれた訳経師がふくまれている。ことに南北朝時代随一の訳経師である拘那羅陀（真諦）は、五四六年に広州に到着、二年後の五四八年に京師についたが、梁末の混乱で各地を転々とし、陳代に入つてからは今の江西・福建の地を経て広州におちつき、制旨寺において多くの仏典を訳出した。真諦が入華してから入寂するまでの二十四年間（五四六～五六九）のほぼ半分を広州およびその周辺ですごし、訳出した経典六十四部、二百七十八巻のうち、彼の名を後世に知られた代表的訳著である『摂大乗論釈』『阿毘達磨倶舎釈論』『十八部論疏』『律二十二明了論』などは皆広州制旨寺において訳出したものである。これより先では、曇摩伽陀耶舎が四八一年に広州朝亭寺で『無量義経』を訳出、[3] 四八九年に僧伽跋陀羅が広州竹林寺で『善見律』を訳出している。[4] この外に、宋代には竺法眷、斉代には摩訶乗がそれぞれ広州で仏典を翻訳したと伝えられている。[5]

真諦が広州にいたころ、彼の学徳を慕つて京師から南嶺を越えて広州に集まつた学問僧の数は非常に多く、そのなかには建康仏教界の標領俊才と目されている僧宗・宗准・僧忍（又は法忍・慧忍・恵忍）・法泰・智愷（又は慧愷・宗愷）・智敭らがいる。ことに智愷は、真諦が『摂大乗論釈』『阿毘達磨倶舎釈論』翻訳の際にこれを筆受しただけでなく、真諦の意を

受けて『倶舎論』を講説し、これを聞くために智慧寺に集まつた著名な文人学士は七十余人に達したといわれる。[6] 智愷はまた、『倶舎論』および『十八部論』の疏本を撰述したが、その稿本は、唐の時代に長安からわざわざ広州まで資料探索にきた道岳によつて広州の顕明寺で発見されている。[7]

斉代の初めころ、建康の白馬寺に出家し、早くから聡明で知られた法安は、王僧虔が湘州に赴任する時に連れていかれたが、のちに番禺(広州)に至り、ちようど攸公が『涅槃経』を講じているのに遇い、法安はこれと問論すること数回、ついに攸公は心に愧じて席を譲つたという。法安は番禺に二年止まり、法事盛んであつたと伝えられている。[8]

地方高官が赴任する際に僧侶を同行させる習慣は当時では盛んなようで、斉の孝武帝の時、宗殼が広州に赴任する時にも法願を同行させている。[9] なかでもとくに異彩を放つているのは宋末斉初ころの比丘尼僧敬の事蹟である。僧敬は会稽の出身で、建安寺の白尼について出家し、元嘉年間(四二四～四五三)魯郡の孔黙が広州に赴任する時に連れていかれ、嶺南の地に止まること三十余年、風化の及ぶところ帰心せざるものはなく、十三家の人が園宅を施捨して仏寺を潮亭に建て、衆造寺と名付けられたという。宋の明帝(四六六～四七二在位)の時に迎えられて建康の崇聖寺に住したが、広州を離れる時には道俗が別れを惜しみ悲しんだといわれる。[10]

曇弘は梁の永初中(四二〇～四二二)に広州番禺に遊んで台寺に止まつたが、のちに交趾の仙山寺に住し、最後には焼身して自ら命を断つた。[11] 梁の道宗は広州で法を弘め、その地で寂した人、[12] 陳の恵哿は晩年、劉璋に随つて南海に赴き、『涅槃論』を豫章に持ち帰つて弘めた人として知られる。[13]

もともと嶺南は僻遠の地で、古くから罪人の流放擯斥の行先である。それは仏教界においても同様で、梁代に僧正・慧超が広州に、宝唱が越州(今の広東省浦県)に流されるところであつたが、出発直前に赦免されたことがある。[14] 宋の道亮は元嘉末年に南越(広州)に擯徙され、弟子智林ら十二人とともに広州に六年止まり、経典を説いて人々を教化した例もある。[15] この外にも智斌・慧琳らが交趾の地に擯斥されている。[16] このような僻遠の広州に、京師の学問僧が相次いで集まつたことは、梁末の戦乱を避ける目的もあつたであろうが、それよりも、真諦およびその訳経事業に協力している多くの学僧、それに護法熱心な刺史欧陽頠のいる広州は、今や仏教の新しい中心の地であると見ていたからではないだろうか。

今まで、広州で活躍した僧尼は大抵外国かもしくは華北、華中地方からきた人たちであつたが、南朝のころから広州出身の僧尼の事蹟にも輝かしいものがある。宋代の比丘尼慧瓊は広州の人である。初めは広陵(今の江蘇省江都県)の南安寺に住したが、四三八年に菩提寺を創建し、四四一年に南外永安

寺などを建て、四四七年孟顗に随つて会稽に行く途中に入寂した。[17] 広州出身の僧尼の事蹟をはつきり記したものとしては、恐らく『比丘尼伝』に見えるこの慧瓊伝が最初であろう。次に、斉代の慧敬・法献はともに広州南海の人である。慧敬は若くして荊楚に学んだあと、故郷に帰つて雲峯・永安の諸寺を修復した。戒節に精しく、志操厳明であつたため、嶺外の僧尼はこぞつてその教えを受けた。のちに勅して僧主となつた。[18] また法献は、初め北寺に住したが寺が古くなつたので改修して寺名を延祥と更めた。のちに蔵薇山に入り、禅戒に棲心した。[19] 梁代の慧済と慧澄はともに広州番禺の人である。慧済は僧喬らとともに京師の竜光寺にいた学僧で、未だ嶺南に帰らずともその令名は嶺南にひびきわたつたと伝えられている。[20] 慧澄は最初南海の随喜寺に住したが、天監の初めころに学校を創設し、道俗を教え導いた。のちに京師の荘厳寺に入つて僧旻について学び、再び南海に帰つて随喜寺で教化に専念し、徒衆群をなしたといわれる。[21] また、陳の時代に智愷が広州の智慧寺で『倶舎論』を講じた時、智敭と道尼ら二十人が聴受し、智愷入寂の際に真諦が尼響・智敭ら十二人に対し、ともに智愷の香火を伝え、『摂論』と『倶舎論』を弘めるよう諭したことが法泰伝に見えている。[22] この記事から察して、当時の広州には僧尼の数がかなりあり、その中には広州出身の人たちも決して少なくないものと思われる。

南朝末までの間、広州に存在した仏寺の数は、仏教資料（とくに僧伝資料を中心にして）によれば、次の十二寺があげられる。かつこ内は出典を示す。

白沙寺（王園寺・制旨寺とも称する。東晋時代の創建。梁伝の曇摩耶舎伝、唐伝の真諦・法泰伝）
衆造寺（潮亭にあつたという。比丘尼伝の僧敬伝）
朝亭寺（出三蔵記集・歴代三宝紀の曇摩伽陀の項、唐伝の真諦伝）
延祥寺（旧名北寺。梁伝の法献伝）
竹林寺（出三蔵記集・歴代三宝紀の僧伽跋陀羅の項）
雲峯寺・永安寺（以上梁伝の慧敬伝）
台寺（梁伝の曇弘伝）
顕明寺・智慧寺・西陰寺（以上唐伝の法泰伝）
随喜寺（唐伝の慧澄伝。以上ともに南朝四代の創建）

しかし、南宋の嘉定年間（一二〇八～一二二四）に撰述された方信孺の『南海百詠』をはじめ、明清二代に編纂された『広東通志』『広州府志』『番禺県志』およびその他の寺刹史料などの記述を綜合すれば、南朝四代の創建とされる仏寺は、華林寺・浄慧寺・広慶寺・宝林寺・聖寿寺・臨江寺・広済寺・月華寺・延祥寺その他あわせて十五寺、それに白沙寺をふくむと、南朝末ころの広州の仏寺は少なくとも十六寺以上存在していることになる。ところで、これら双方の記録を対照して見ると、寺名が共通するのはわずかに白沙寺（王園寺又は制

旨寺）と延祥寺だけで、残る二十余寺は互いにどういう関係を有するか、はなはだ不明である。また、『高僧伝』の曇摩耶舎伝に見える白沙寺は、南朝時代に王園寺と改称されたものと思われ、『続高僧伝』の真諦伝および『大唐内典録』の真諦の項によれば、王園寺の外に制旨寺があり、真諦はこの両寺の間を往き来したと記している。しかしながら、地方志資料では最初から白沙寺の名は見えず、しかも王園と制旨は同寺異名であるとしている。

この外、『広東通志』などには智薬・景泰・貞俊らの如き南朝四代の広州に大きな足跡を残したという僧侶の名が見えるが、僧伝資料には全く現われない。地方志類は個別的なことがらには詳しいが、編纂年代が遅く、古代・中世に関する記録は正確性に欠くところが多い。一方、主として華北、華中の人たちによって撰述された仏教史書は、京師やその周辺のことについては詳しいが、広州のような僻遠地方の仏教事情は大抵おろそかにされるという欠点がある。地方の仏教の歴史を究明しようとすれば、仏教史書をもとにして、その上に地方志資料を生かすことが基本的であるが、反対に仏教史書の足らざる所を地方志資料によって補完することもでき、無視できない価値を有しているといえる。

1 『歴代三宝紀』巻八～十一（大正四九・七四・下～一〇一・下）、小野玄妙『仏典総論』九九～一四二頁参照。

2 曇摩伽陀耶舎・摩訶乗・竺法眷・翔公及び本文下記の四人。

3 『出三蔵記集』劉虬序（大正五五・六八・中）、『歴代三宝紀』（大正四九・九五・中）

4 『出三蔵記集』（大正五五・一三・中、同八二・上～中）、『歴代三宝紀』（大正四九・九五・中～下）

5 『出三蔵記集』（大正五五・一三・上～中）、『歴代三宝紀』（大正四九・九五・中）

6 『続高僧伝』（大正五〇・四三一・上～下）

7 『続高僧伝』（大正五〇・五二七・中～下）

8 『高僧伝』（大正五〇・三八〇・上）

9 『高僧伝』（大正五〇・四一七・上）

10 『比丘尼伝』（大正五〇・九四二・上～中）

11 『高僧伝』（大正五〇・四〇五・下）

12 『続高僧伝』（大正五〇・四七四・上）

13 『続高僧伝』（大正五〇・四三一・下）

14 『続高僧伝』（大正五〇・四二七・下）

15 『続高僧伝』（大正五〇・三七二・中）

16 『高僧伝』（大正五〇・三六九・上、同三七三・下）

17 『比丘尼伝』（大正五〇・九三八・中）

18 『高僧伝』（大正五〇・四一一・中）

19 『高僧伝』（大正五〇・四一一・中）

20 『続高僧伝』（大正五〇・四七三・上）

21 『続高僧伝』（大正五〇・四六五・上～中）

22 『続高僧伝』（大正五〇・四三一・上～下）

（竜谷大学講師）